

令和5年度 千代田学成果報告

専修大学国際コミュニケーション学部

2024年3月



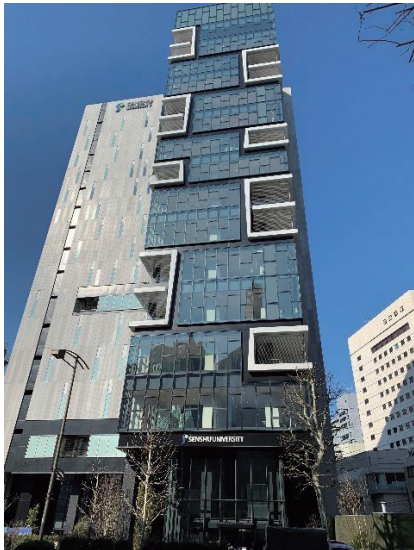


図 1

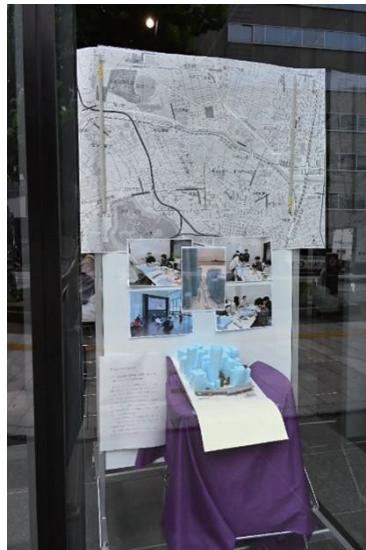


図 2



図 3

図 1 専修大学神田校舎 10 号館、校舎は南向き、靖国通りに面している。右背後に見えるのは 1 号館。

図 2 フロントでの展示では、西神田エリアのジオラマとその地域の平面地図。

図 3 ゼミ生の作成の写真、写真左上では立体模型の制作状況、左下では森美術館におけるジオラマ展示の現地観察の様子を紹介。模型は実際の建物の高さを縮尺しており、地図の上に配置、首都高速は段ボールで作成した。➡本文 1



図 4



図 5

図 4 神田警察通りの道路整備工事で伐採されたままとなり、「ひこばえ」が生えてきたイチョウの樹。➡本文 4

図 5 古い手書きを残したお店の看板。大きく変化する街で、昔のまま変わらずにいることにより、いつのまにかランドマークとなっている。高層建築に囲まれ、人間の視線に近い低い建築物が、歩く人にはむしろランドマークとなる例である。➡本文 6・後記

目 次

はじめに

1、西神田エリアの商店への学生による取材と立体模型の展示(今井ゼミ).....	2
2、Report Chiyodagaku Imai Zemi	2
3、古代メキシコ文明に関する公開講座	3
4、ガイコツを作るー異文化を学び、発信するということー(小林ゼミ)	4
5、映画『谷中暮色』上映会(土屋ゼミ)	4
6、千代田区における学生のフィールドワーク(土屋ゼミ)	6
7、映画『私だけ聴こえる』上映会	7
8、誠心堂書店でのインタビュー(土屋ゼミ)	8
9、後記	

はじめに

【令和5年度の専修大学国際コミュニケーション学部「千代田学」テーマ】

「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究ー千代田区の街と人をめぐるフィールドワークとそのドキュメンタリー映像の制作」

【概要】昨年度を引き継いで、今年度は、「ウォーカブルなまちづくり」という千代田区の方向性にリンクさせ、実際に街を歩くことで出会ういろいろな課題や人との出会いを重視しました。その記録やそれによって得た考察を、映像を含めた方法で発信することをめざしました。フィールドワークを重点にして区民の生活を見聞、区民との交流を進めました。その成果として、ドキュメンタリー映像を作成しました。

【教員スタッフ】

土屋昌明（教授・研究代表）	今井ハイデ（准教授）	船橋淳（客員教授）
根岸徹郎（教授）	小林貴徳（准教授）	上原正博（教授）

令和5年度の専修大学国際コミュニケーション学部「千代田学」は、令和4年度採択の「千代田学」を引き継いで、文化的多様性、国際性、千代田区の街と人をめぐるフィールドワーク、ドキュメンタリー映像の制作を軸として研究を進めました。特に今年度は、「ウォーカブルなまちづくり」という千代田区の方向性にリンクさせ、都市社会学を専門とするスタッフも参加して、実際に街を歩くことで出会ういろいろな課題や人との出会いを重視して進めました。そして、その記録やそれによって得た考察を、映像を含めた方法で発信することをめざしました。学生によるフィールドワークを重点に置いて千代田区を捉え、普段は通勤・通学だけで認識できない千代田区民の生活を見聞し、インタビューや上映会などを通して地域の人びとと学生の交流を促進したいと思っています。（土屋）

1、西神田エリアの商店への学生による取材と立体模型の展示

本学部異文化コミュニケーション学科の今井ハイデ・ゼミでは、街を実際に歩き、そこで出会った人々対話を重ねました。主に西神田エリアの商店の店主さんやそこで働いているかたに取材しました。それを記述して考察することにより、街が持つさまざまな顔、姿を浮き上がらせることができます。

その一環としての展示を、本学神田校舎 10 号館フロント（表紙裏図 1）で 2023 年 6 月 19 日(月)～28 日(水)の 8 日間おこないました。本年度の千代田学の取り組みとして、水平面の広がりだけではなく、垂直面の高さも感じ取ることができるように、立体模型をゼミ生が作成しました。初めての試みとして、専修大学 10 号館のある西神田エリアを中心に作成しました（表紙写真、表紙裏図 2、3）。

この模型から、学生たちや街角を歩く人々が、自分たちの立っている場所に対して、これまでと少し違ったイメージを持つことができます。いつも自分の足元ばかりを見てしまう視点を、私たちが日々をすごしている千代田区の少し広い空間のなかへと置きなおす試みです。この模型から、学生たちや街角を歩く人々が、自分たちの立っている場所に対して、これまでと少し違ったイメージを持つことができます。いつも自分の足元ばかりを見てしまう視点を、私たちが日々をすごしている千代田区の少し広い空間のなかへと置きなおす試みです。（土屋）

2、Report Chiyodagaku Imai Zemi

In 2023, a comprehensive seminar research was conducted focusing on the multifaceted aspects of urban life, with a specific focus on the Chiyoda ward. This seminar sought to deepen students' interest in the everyday dynamics of urban living while encouraging them to explore the sociological meanings embedded within city life. Through a blend of theoretical insights and practical fieldwork, the seminar aimed to enhance students' abilities to plan, develop, and execute social science research, particularly in the context of Chiyodaku and Kudanshita.

The seminar was a part of the broader Chiyoda Studies Project (2023), which aimed at analyzing how everyday life in the Chiyoda ward is changing in response to various global and local factors, based on long-term interviews with locals and visitors alike. In particular, the project sought to gather a wide range of opinions and suggestions from local residents to better understand and contribute to the revitalization of local communities. Through engaging with diverse viewpoints, students were encouraged to develop and consider new approaches to urban planning, tourism, and regional branding.

Research activities included understanding the definition of local communities, interviewing various community members, reflecting on social issues through detailed data analysis, and proposing specific initiatives for each region. The first semester's activities laid the groundwork for this exploration. After an introduction to urban renewal and gentrification, students embarked on a 10-week seminar-work that included city walks, visual mapping, observation, and interviews, particularly focusing on the Jinbocho area. This phase allowed students to create maps, conduct initial interviews reported by Nikkei Newspaper in December 2022, and compile a list of future interviewees.

As the seminar progressed into its second phase, discussions expanded to cover the use of local parks, the food landscape of Chiyoda, the reuse of highways, and the utilization of skyscraper rooftops. This culminated in the creation of a mock-up model of Kanda Jinbocho as the one assignment. Afterwards students presented their initial research findings in poster form, further delving into their topics, collecting more data, and analyzing their findings for their final graduation theses. The seminar also included external meetings with experts and explorations of Tokyo local urban make-up.

The seminar composition reflected a growing interest in urban studies, with participation increasing from 5 students in 2022 to 10 students in 2023. This seminar not only provided students with a solid understanding of the complexities of urban life and development but also equipped them with the skills to analyze, study, and express urban phenomena through various methods and media. The focus on both global and local perspectives enabled students to gain a comprehensive understanding of the past, present, and future of cities in the era of globalization. Through this seminar, students were able to contribute meaningfully to the academic discourse on urban studies, particularly in the context of Chiyoda ward, providing fresh insights and perspectives on the evolution, culture, and socio-economic dynamics of urban living. (Imai Heide)

3、古代メキシコ文明に関する公開講座

2023 年 6 月 16 日～ 2023 年 9 月 3 日に上野・東京国立博物館で特別展「古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン」が開催されたのにあわせ、本学部異文化コミュニケーション学科では、この特別展を 20 倍楽しむための企画として、広く千代田区民と一般の方々に向けた公開講座を黒門ホール（神田キャンパス 10 号館 3 階）で 8 月 1 日（火）17：30～19：40 に実施しました。異文化コミュニケーション学科 2023 年度公開講座「古代メキシコ文明への誘い—マヤ、アステカ、テオティワカン— 古代メキシコ展を 20 倍楽しむ！」と銘打って、本学部の井上幸孝教授が、メキシコ古代文明の歩みとその遺跡について、現地の写真を多く交えながら、「メキシコの古代文明」「メキシコの遺跡をめぐる」というテーマで前後 2 時間にわたってわかりやすく解説しました。

第 1 部では、メキシコを含む古代メソアメリカの特徴について整理したうえで、3500 年に及ぶ文明の歩みを説明しました。「スペインによる征服で終焉を迎えたが、メソアメリカ先住民の文化は現在も存続している」ことの具体例として「死者の日」と呼ばれる祭礼などが具体的に紹介されました。

第 2 部では、テオティワカン、パレンケ、チチェン・イツァといったメキシコを代表する遺跡の数々を、井上教授自身が撮った写真を中心に用いて紹介しました。

井上教授の講演を受け、土屋が中国古代宗教の観点から、空間を隔てた別の文化が相似した表現に至る例をあげてコメントを寄せました。世界の地域や文化を横断的に学ぶ公開講座となりました。千代田区民が 100 人近く集い、井上教授への質問がいつまでも終わりませんでした。

今回の講座は、昨年度の「千代田学」でメキシコ大使館の協力を得たことを引き継いでいます。講座冒頭のあいさつで、メキシコ大使館のバレリア・ソリス文化担当官より、日墨関係のさらなる深化に期待を寄せる祝辞を賜りました。（土屋）

4、ガイコツを作る―異文化を学び、発信するということ―(小林ゼミ)

ガイコツとは、なんとも不思議な存在ではないか。こうして原稿を書く私のなかにも、いまこの文を読んでいるあなたのなかにもガイコツがいる。民族や宗教、国籍、政治的信条や身体的特徴がいかに異なろうとも、私たちの内側には例外なく潜んでいる。ところが、おもしろいことに、文化が異なれば、ガイコツに付与された意味が違ってくる。

2023年度の千代田学関連事業で制作したのは、メキシコの文化的伝統「死者の日」を彩るガイコツの等身大立像である。恐ろしさや生への執着心などではない。むしろ、底抜けに陽気で派手なすがたのガイコツ像が学生有志の手によって作り上げられた。

ちょうど一年前、2022年度の千代田学関連事業では、「死者の日」の祭壇を再現し展示したが、今回はその構成要素のひとつガイコツにフォーカスした。メキシコで「カラベラ」と呼ばれ親しまれているガイコツは、19世紀後半に活躍した版画家ホセ・グアダルーペ・ポサーダの作品によって広く知られるようになった。2023年がポサーダの没後110周年にあたることもあり、ポサーダがカラベラに込めた思いを発信することを目的として、ガイコツ貴婦人の制作と展示を実施することにした。

等身大立像の制作にあたったのは、海外研修プログラムでスペインやメキシコに留学していた国際コミュニケーション学部2年生と3年生、そして、2024年春に海外研修へ旅立つ1年生の有志である。ウェブサイトや文献などでイメージを膨らませつつ、学生たちは2体の服飾用トルソーに着色し、衣装を着つけた。肝心の頭骨はアクリル染料を用いて丁寧に仕上げられた。昨年度と同様に、本学10号館1階の靖国通り側エントランス脇を展示スペースとし、マリーゴールドの造花や電飾用ロウソクとともに設置されたガイコツ貴婦人の像は、道行く市民を見守る格好となった。

ポサーダが生きた19世紀末から20世紀初頭のメキシコといえば、フランスのナポレオン三世の干渉による帝政期とそれに続くボルフィリオ・ディアス大統領の長期独裁政権、さらには民主化を求めるメキシコ革命期へいたる激動の時代だった。政治を風刺する作品のほか、民衆の享楽や不安をユーモアたっぷりに版画に刻み込んだポサーダにとって、カラベラは極めて民主的な表象だった。白人系であっても褐色であっても、富める者も貧しき者も、死んでしまえばみな真っ白なガイコツだ。ポサーダは近代化を成し遂げつつも社会階層が明白で、貧富の差が拡大するメキシコ社会の偽善のさまを皮肉って彼の作品にカラベラを登場させたという。

ともすれば、「不吉さ」や「死」を連想させる展示だなどと批判されかねないモチーフであったが、展示の背景を解説するポスターを掲示したこともあり、本企画のねらいは展示を見る人に伝わったように思われる。異文化を理解するうえで重要なのは、表層のみに目を奪われるのではなく、その歴史や背景を学び、どのように異なるのか思考を巡らすことではないだろうか。千代田学関連事業としての展示が、学生の学びを社会に発信する貴重な機会になることを今後も期待したい。(小林貴徳)

5、映画『谷中暮色』上映会

『谷中暮色』は、本学部客員教授の船橋淳監督の作品です。東京の下町、谷中を舞台にした若者たちのラブストーリーと、幸田露伴原作『五重塔』を素材とした時代劇とが交錯し、そこに実際の町民にインタビューするドキュメンタリー映像が織り込まれるという凝った構成の映画です。焼失した五重塔を中心に、現代と江戸を行き来するフィクションと、谷中の姿を捉えたドキュメンタリーが一体となり、

失われた過去の街の生活の意味を問いかけてきます。ホームムービーを保存・修復する NPO で働く女性、かおり（佐藤麻優）は、昭和 32 年に焼失した谷中の五重塔と、それを記録した 8 ミリフィルムが存在するらしいということを知り、地元谷中のお寺、霊園の墓守、伝統工芸の職人、郷土史家に取材をしていきます。その過程で彼女は、地元の青年、久喜（野村勇貴）と出会います。それと並行して、時代を遡った江戸中期に舞台は移り、五重塔建設に燃える大工の十兵衛（野村・二役）は、親方や妻お浪（佐藤・二役）の反対を押し切って、独力で塔を作り上げようとしていきます。

本作は、映画の作り方として興味深い点があります。

第一に、一人二役を通して、現代の 2 人の若い男女のドラマと、江戸時代のドラマとが重なり合う点です。これにより、過去のドラマに対して現代人から見たある種の共感が持たれるとともに、露伴の原作が持つモチーフの投影が現代のドラマに反映するという現象が生じます。例えば、久喜のかたくなな性格と街のゴロツキとの衝突には、露伴が描いた十兵衛の江戸っ子的な味わいが投影されているようです。また、露伴の原作で十兵衛のあだ名は「のっそり」とされており、劇中の地元の青年・久喜の演技には、そんなのっそり感が漂っています。露伴の擬古文に登場する語彙の多くは、現代では通用しなくなっていますが、この「のっそり」は今でも生きた言葉で、それを監督は劇中にうまく取り入れているのがわかります。

第二に、中心的な青年たちの仕事が、ホームムービーを保存・修復する NPO という設定である点です。かつてデジタル以前に撮影された 8 ミリや 16 ミリの映像、ハンディカムなどで取られたビデオテープの映像は、世代交代につれてどんどん廃棄されているのが現実です。こうした映像には、ありし日の庶民の日常が記録されており、非常に重要です。これを収集・修復・保存・上映する活動は、現在、なおざりにされています。本作は、物語のこのような設定により、過去の映像の重要性、それがもたらす人々の過去への愛着、過去から現在へと続く生活の大切さを表現しています。劇中にはフィルムを上映するシーンが登場し、そのスクリーンには実際のホームムービーの映像が使用されています。つまり、映画の中で映画が上映されるのです。そこに映し出される映像は、まったく個人の過去の生活にすぎないものではありませんが、劇中における設定ともあいまって、妙に感動を催させるものがあります。他人の子ども時代だったり、昭和の風景だったりするものが、あたかも自分の子ども時代が再現されているような感覚をもたらします（もちろん見る者の世代によって違うでしょうが……）。

第三に、ドラマとドキュメンタリーが交錯する構成になっている点です。第二にあげたホームムービーの上映がやはり実際の上映であり、ドキュメンタリー的な手法ではありますが、俳優がインタビューする場面は実際のインタビュー映像です。シーンの中には、俳優ではなくて、監督本人がインタビューしている映像もあります（会話の声でそれとわかる）。この点こそ、千代田区でフィールドワークをしようという私たちのプロジェクトが参照すべき本作の特徴です。ドキュメンタリーとドラマの境界がますます曖昧になっていっているというのは、船橋監督の持論で、現在の世界の映画シーンを言い当てています。この作品は、そうした映画界の情勢を意図的に創作に持ち込んだものです。ある意味、私たちのプロジェクトは、その意図的な創作のドキュメンタリー的な側面を切り取って参照しようとしており、あるいは本作の方向性にたがうともいえます。しかし私たちとしてはむしろ、フィールドワークによる取材が持つ可能性の一つとして受け取るべきだと考えています。（土屋）

6、千代田区における学生のフィールドワーク

今回の千代田学の実施を機に、私たちは、千代田区に立地する専修大学の教員・学生でありながら、地元に対してまったくコミットしておらず、関心もほとんど抱いていないという現実を反省させられました。そして振り返ってみると、現在の神田神保町界隈は大規模再開発が進められており、地元根差した生活や古き良き商店などが次々と消失していつている現実には気づかされました。個人的な思い出を記させていただくと、私が若い時から親しんだ、すずらん通りのスキートポーズとロシア亭がなくなりました（表紙写真）。その南側は、かつては本の間屋さんが何十軒も立ち並んでいましたが、現在は東京パークタワーと神保町三井ビルディングが屹立しています。先日、駿河台下の和菓子屋さん「さゝま」（表紙裏図 5）に取材させていただいたところ、店の正面に小堀遠州の手紙の茶掛けがかかっており、店主さんと茶掛けの話で盛り上がりました。茶掛けのくずし字は、相当に修練しないと読めないもので、店主さんは、茶掛けを読み解く達人の波多野幸彦先生に教わったというお話でした。この波多野先生の事務所は、かつてすずらん通りの裏のアパートにあり、学生だった私も、道路から木の階段をギシギシと登って行って、波多野先生にくずし字の読み方を教わったものです。このような達人がいたのは、まさに古書店がたくさんあるこの界隈に特有のものです。

古いお店が消えていく状況は、神田神保町に限られているわけではありません。例えば、地下鉄半蔵門駅前のお店にきんつばを買いに行ったところ、2023 年 11 月で閉店すると告げられました。この麴町や番町エリアは、かつて武家屋敷があったところで、和菓子店もその需要が頼りだったのですが、いまはそうした古い家が大手の不動産会社を買われ、大きなビルに変わっていくとのことです。まさに巨大な変化が起こりつつあるのです。

そんなわけで、私のゼミのフィールドワークは、こうした昔から神田界隈を承知しているかたがたに聞き取りをおこないました。例えば、地元の靴屋さん、タバコ屋さん、和菓子屋さん、かつて印刷工場を営んでいたかた、本の「箱」を制作する工場を営んでいたかた……。

そのプロセスで、並木道の道路整備の問題に行きあたりました。すずらん通りの南、学士会館のわきの神田警察署前の大通りには、西の共立女子学園の前から神田駅までイチョウ並木があります（表紙写真）。共立女子学園の前のイチョウは 100 年近くの樹齢らしく、すばらしい並木として保存されています。そこから十字路を渡った学士会館前の部分は、区の道路整備の計画に沿ってイチョウが伐採される予定で、すでに数本が伐採されました（表紙裏図 4）。周辺住民には、このイチョウ並木の伐採に納得できないかたがたがおられ、伐採工事は 2023 年 11 月現在、ストップしているようです。この事態は、現にこのエリアで起こっている現実であり、私たちとしてはどのように考えたらいいのでしょうか。今回の千代田学の研究において、この問題を神田の街が変化していく際の象徴的なテーマとしてとらえ、住民へのインタビューをもとにしたドキュメンタリー映像の制作をおこないました。（土屋）



* 共立女子学園南側、きれいに整備されたイチョウ並木、歩道と自転車道。

7、映画『私だけ聴こえる』上映会

2023年11月8日(水)16:35から、松井至監督のドキュメンタリー『私だけ聴こえる』(2022年、76分)を専修大学黒門ホールで上映後、監督と本学部の河野真太郎教授との対談を同5階10052教室でおこないました。

本作は、コードという言葉が生まれたアメリカでコード・コミュニティを取材した初めての長編ドキュメンタリーです。「コード(CODA)」とは、耳の聴こえない“ろう”の両親から生まれた、耳の聴こえる子どもたちの英語(Children Of Deaf Adults)の略称です。コードは、家では手話を、外ではオーラルの言葉を使います。それゆえ、学校では“障がい者の子”という扱いを受け、その一方、“ろう”からは距離を置かれてしまいます。つまり彼らは、聴こえる世界にも、“ろう”の世界にも居場所がないのです。

監督は、彼らのうち、3人にスポットをあてます。「私はろうになりたい」という深い欲望を秘めているナイラは、聴力に異変をきたしてしまいます。ジェシカは、自分を育ててくれた“ろう”の母から離れて、大学に進学したいと葛藤します。3人目のMJは、コードである自分の人生を手話で物語ることで自分を肯定し、同じ仲間を求めています。そしてもう1人、手話通訳士をするアシュリーは、コードとしての葛藤を乗り越えているように見えながらも、妊娠を機に「お腹の子が“ろう”になるか聞こえる子になるか」という悩みを抱えてしまいます。

本作は、2016年TokyoDocsで最優秀企画賞、2021年に北米最大のドキュメンタリー映画祭HotDocsに選出、令和4年度が最後となる文化庁記録映画大賞を受賞しました。

本作を千代田学の企画として上映・討論したのは、直接的にはもちろん私たちの身近や千代田区にも“ろう”やコードのかたが住んでおりながら、私たちの視界には入らない傾向が強いのを反省してのことです。この点について、松井監督が次のように語ったのが印象的でした。

松井監督は、東日本大震災について2015年にNHKワールドという番組を任せられ、その中で東日本大震災の復興に関して撮ることになっていました。そのとき、地震があってから、津波が来るまでの時間に何が起きたのか、もしかして、音が聞こえない人が気づかずにいたんじゃないのか、その絵が思い浮かんだ、ということです。

『私だけ聴こえる』の上映では、私たちの視界は非常に狭いという反省と同時に、コードが持つ苦悩だけでなく、文化的な個性にも注目したいと考えました。手話を一種の言語翻訳だと考えた場合、コードはバイリンガルとして育てられ、言語コミュニケーションの機能だけでなく、“ろう”の親の生存に欠かせない存在ともされています。このような状況は、どんな言語のバイリンガルよりも過酷であり、コミュニケーションの問題としても重要だと考えます。(土屋)

*以上、2以外は同様な文を本学部紀要『国際コミュニケーション研究』第3号(2024,3)にも掲載した。



8、誠心堂書店でのインタビュー

* 神保町交差点から水道橋方向に少し行った左側に「誠心堂」があります。古い家で、古本屋さんらしい古本屋さんだと感じさせられます。2023 年 11 月 29 日、私たちはお店のガラス戸を引いて中に入りました。お店の真ん中の本棚の奥に、店主の橋口侯之介さんが座っておられました。

——今日はゼミの一環でインタビューさせていただきたいと思います。まず、神田という街はカレー、古本ということで有名ですが、神田についてどんな印象をお持ちでしょうか。

橋口侯之介さん……印象というか、私は本屋だからね、神田は本屋の街ということでもう 150 年続いています。江戸時代、この辺は旗本屋敷、大名屋敷だったんで、町民はいなかったんですけど、明治維新になって、幕臣がみんないなくなっちゃって、空いたところに大学がどんどんできたんですよ。だから東大の最初のスタートはここだし、それから一橋（大学）でしょ、それから音大、芸大もこのあたりにあったっていうふうにして、もともと学校がスタートしたんで、そこから専修大学、明治大学、中央大学とできてきて、そこを目指して本屋さんが店開きを始めたんですよ。江戸時代まで本屋は全然なかったんです。明治（時代）になって大学ができたと同時に、本屋も何軒かできてきて、最初の本屋は出版と古本と兼業だったんですよ。岩波書店とか、有斐閣とか、富山房とか、三省堂とかもそうですね、神田にある比較的大きな出版社は、もともとは古本屋だったんです。そのうち、古本は古本屋に任せて、自分たちは本作りに専念していく、というふうにしてできてきたんです。そのあと今度は関東大震災で、このあたり一体焼けちゃったけど、本屋さんたちもすぐ頑張って再開したし、そうすると、そのたびごとに本屋が増えていって、それでたぶん、大震災のあとが、いまに近いかたちができてきたんだと思います。

そのあとは空襲ね、戦争中の空襲でうちは焼けちゃいました、こっち側の白山通り側はね。だけど、向こうの靖国通り側のところは空襲うけなかったんですよ。だから、それもあって本屋が生き残れたんですね。だから戦後も、そのまま本屋を続けられたんです。うちの先代は、残念なことに全部焼けちゃったんですけど、でも、戦争終わったら、もうその秋には、「バラック」って言ってね、簡単な建物作って、そこでもう本並べて売ったっていうんです。またよく売れたんだそうです。戦争終わってね、みんな本が焼けちゃって、本に飢えてたからね。そのころは何でも売れたよっていった。そういうこともあって、おかげさまで本を買う人売る人、もちろん出版社で作る人も、そういう関係がこの町の中でひとつの世界を形づくってきたのが、ずっと生きてきたということが大事だ。バブルのとき、ちょっと心配だったこともあったんですけど、そのためにいなくなっちゃった古本屋さんは、そんなにいません。大変だったのは、製本屋さんとか、印刷屋さんとか、出版の周りにいっぱいいたんですけど、その人たちはほとんど土地を売っちゃって、出て行っちゃいました。

——何か昔といまとで変わったことや町並みなど、どうですか。

それは変わりましたね、本屋の街として、私は若いころからずっとやっています。私の家内が、正確にいうと、このお店は家内の先代が始めた店で、私は二代目のお婿さんで、家内はここで育ってるんで、彼女が子供のころはこのあたりの小学校出てるわけで、友だちもみんなこのあたりにいて、子供同士でよ

く遊んだりしたんですね。私がお婿さんとして来たのは 1970 年代の後半、もう高度成長時代に入っていて、既にビルが少しずつ立ち出していて、もともと神田に住んでいた人たちがどんどん引っ越しちゃって、家内の同級生も半分ぐらいいなくなっちゃってね。そういう意味での変わり方です。いまもっと変わったとするなら、もっと巨大なビルがどんどんできてきました。でも、直接、本屋街としてのブランド力を失わせるような立ち方ではないと思います。そういう変化はありません。

——古本の魅力というのは何でしょうか？

私は、最初、大学を出てすぐは出版社に勤めたんです。本が好きでしたから、小さい時からね。だから、この世界で生きていきたいなと思って出版社に入ったんですけど、その出版というのは、もちろんいい仕事なんですけど、会社の中でやるから、なかなか自分の意思が全部通るわけじゃなくて、会社からこれやれ、あれやれっていうのをやったり、ちょっと嫌なこともしなくちゃいけない。自分でやりたいことをせっかくできて、売れないと叩かれる。そういう世界でやってましたから。ちょっと自分が考えた本の世界と違くなって感じていたところへ、この本屋の娘、古本屋の娘と、その出版社で知り合ったんです。それで結婚して、そんで跡取りがいない、じゃ俺、古本屋やろうか、っていう話をしてたら、ばたばたと決まって二代目に収まったんです。

古本屋のいいところは、自分の意志で本が選べるということなんです。その代わり売れる、売れないという問題があって、売れなければ店を開いていけなくなっちゃうし、売れば儲かるしっていうところが、自分の責任で全部やなくちゃいけない。自分の責任でやるということは、自分で本の勉強、いろいろな本の世界の勉強をしなくちゃいけないんで、その勉強しました。それがけっこう役に立ちました。今日までずっとまだまだ勉強中の感じです。私も七十代後半となりましたけど、まだ新しい本と出会うし、本当に勉強しているさいちゅうって感じです。いまでもそういう古本の魅力の中で生きてます。

——その中で何か若者に伝えたいことなどはありますか。

最近ちょっとある人の本を読んだらね、いま Z 世代といいますよね、その人たちの本離れが進んでいるとよくいわれるけど、その人の本によると、今の若い人は決して本離れしてない、結構みなさん本が好きですよ、いまの高校生たちの読書率は何十年前と大して変わってませんよ、っていう統計を出したりしている。その本を読んで、私は非常に心強い気持ちになりました。ですから、若い人が、いまはスマホとか、いろいろなかたちでメディアがたくさんありますが、本っていうのはやっぱり選択肢のひとつとみんな思っていると思うんですよ。その世界をやっぱり伝えて残してほしいなという気持ちはあります。

——台湾の映画監督さんの『珈琲時光』（2003 年）という映画で舞台として使われたと思いますが、それについてはいかがですか。

それについては、侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督ね、私も直接面識とかはなかったんですけど、

ときどきこのあたりはよく歩かれたそうなんです。それで、うちとか、いもやさんというてんぷら屋さんとか、喫茶店とかを見て、このあたりをひとつの日常を切り取る場として選びたいなと考えたんだと思うんです。それで、うちが選ばれて、ここで撮影さしてくれというお話を伺ったんです。一青窈さんもいらして、楽しかったですよ。撮影中は、ハウ監督も非常に気さくな人で、スタッフの人も気さくで、よくみんなで話しました。

——その映画の中で何か魅力に思った部分がありますか？

その映画『珈琲時光』、今度ビデオをちょっと見てご覧なさい。正直言って、おもしろい映画じゃありません。いまどきの切ったり張ったり、そういう映画じゃないんです。やっぱり小津安二郎みたいな感じで、本当の日常を切り取るという映画なんです。だから淡々と進んでいく。そのときうかがったんですけど、脚本もなかったらしい。浅野（忠信）さんがここで古本屋の息子で主人をしていて、そこへ一青窈さんが訪ねてきて、いろんな話をする。その場面を外からね、あそこからずっと10分ぐらいカメラ回しっぱなし、カメラ固定してね、二人で話しているシーンを撮ったんです。しかも、その二人に脚本があって喋らせてるわけじゃないんですよ。撮影する前にスタッフの人が、こういう話をここで話してくださいっていうだけだったんですよ。浅野さんもちょっと戸惑ってたけど、よくやりましたよね。しかも、このうしろに犬がいて、うちの犬だったんですけど、初め邪魔だからどけようと思ったら、監督がそのままでいいよと。それで浅野さんと一青窈さんのうしろ側にうちの犬がちょろちょろちょろろして、ただ二人にすごく慣れてたんで、結構うまくいったんです。実際その画面は、犬がいなかった場合は採用されなかった。それから、もう一人、有名なフランス文学の映画評論家の先生がいらして、うちの本を買って、これくださいって画面も撮ったんです。でもそれは採用されなかった。三度ぐらい撮って、けっこううまくいったのに、もう一回とかって、浅野さんも何でだろうとかっていうぐらいだったけど。それぐらい、ひとつの画面にものすごく集中する監督なんですね。だから、それがわかる人にはいい映画だと思います。

——神田の街では、現在、イチョウ並木伐採という問題があがっていると思うんですけど、その問題についてはどう思いますか。

それは善し悪しで、うちの前もイチョウ並木なんだけど、ここは秋になると銀杏が大量に落ちてくるんです。みんな踏んづけて歩いて行くでしょ。だから臭くなっちゃってたまらないんだ。だからって、銀杏がないほうがいいと思ってはいないんだけど、秋口になると、銀杏の実を取る人が来て、ある程度伐採してくれるんですよ。今年はおかげで、銀杏がどんどん落ちないで済みました。イチョウ並木自体はとってもいいんだけど、それも善し悪しだなんてところはあります。だから、町作りとそういう木々ね、どういう風にやっていくかってのは、いま明治神宮でも並木伐採の問題をやっているけれど、やっぱりきちんと考えてやんなくちゃいけないと思いますね。木は絶対に必要だからね。大事なことだと思うんですけど、それをどういうふうにやっていくのか、ちゃんとやってほしいなと思います。

——本屋さんの周囲のかたは伐採については何か意見をお持ちでしょうか。

このあたりでは、あまりそういう話はないね。むこうの神田警察通りでは問題になりましたね。だって、いきなり全部切っちゃうってね、全然相談もなく、いきなり切られちゃったから、そりゃ地元の人も反発しますよね。うちの前も、ここまで木を切るって、木にいったん、この木を切りますみたいな印がついたこともあるんですよ。でも、なぜか知らないけど、たぶん、神田警察通りの問題があったからでしょうけど、取りやめになっちゃいました。それこそ説明は一切ないですよ。

逆に質問したいんだけど、みなさんは、専修大学のほうにいますでしょ、この神田の町を歩いて、ここは本屋の街だなんて実感してます？

——本屋がいっぱいあるなってことは分かります。

ああ、それでいいんです。そこでちゃんといい本を買えなんて言いません。ただ、そこに何となく本屋があって、それがたくさんあるなあという世界の中にいることの心地よさみたいなものを感じてほしいんです。これ、神田の書店マップなんですけど、ご覧になったことがあります？ 神保町三丁目から神田川町ぐらい、この町には大体百数十件の本屋さんが、古本屋が、新刊屋さんもあるし、出版社もたくさんあるし、そういう意味で非常に古い街だと思うんです。それが、ひとつのブランド力を持っていると思うんです。もちろん学者だとか本の関係者だとかはそんなこと知っていると思うし、今や世界的にも知られるようになって、最近、外国人が増えましたよ。こんな難しい本を見ても分かりもしないけど、でも、一通り入ってみて、何か言って帰っていきますよ。そういうのは、しばらく前まではなかったけど、最近は出てきました。それはそれでね、広い意味でいいことだと思います。このブランド力を活かし続けるというのが、これから私たちが求める街づくりですよ。だから、巨大なビルが立つから反対とか、そういうことじゃなくて、ビルが立とうと構わないんですけど、そのまま、やっぱり本屋がここに百何十件、この街に存在しうるということが大事だと思っているんです。それを活かしてくれる町作りを望みます。

なぜ百何十件も本屋さんがこの狭い町で成り立つと思います？ 本屋の街だからって、確かに日本中から本を買いに来てくれるけど、百何十件も本屋があって過当競争だと思いませんか？ でもそれで成り立ってんのは、日本にある本の点数って、何百万点ですよ。それらの本を全部一括して置いておけるような店ってないでしょう。国会図書館ぐらいです。なくていいんです。要するに、それだけの本を切り取って百何十件いるんです。うちは書道、それから立ち上げて特化しました。こうやってこんな古い本だとか、書道だけで食べていけるのかとちょっと心配になりますけど、食べていけるんです、おかしいことに。食べていけるのは、日本全国に書道を勉強したい人は、何万人かいるわけです。その人たちが欲しい本だったら神田の誠心堂と何とか、そこらに行けばあるはずだといって来てくださるんです。また別の人が、例えば、仏教書となれば、仏教の本だけざっと扱っている店もあるんですけど、お寺の坊さんとか、そういう勉強する人たちがいて、その人たちは神田に行ってあそこ、あそこって行って、行けば欲しい本が見つかる、そういう世界なんですよ。つまり、巨大な本の図書館のいくつかの棚を一軒一軒の古本屋さんが担当しているというふうに見てくれるといい。それだったら過当競争にならずに、お隣は文学書を扱い、こっち側の店は仏教の本を扱ったり、遊びの本を扱ったり。色んな店があってそれぞれ成り立つんですよ。そういう意味で、日本は本がすごい盛んな国だったから、それだけ本の奥深

い世界があって、それを切り取ることで、神田という街に百何十件もの本屋さんが成り立つことができた。だから、そのそのブランド力と、私はいつも言うんですけど、これは活かしていかなきゃいけない。これは 100 年後、200 年も残っていてほしいと思うんです。どの店もちょっと後継ぎがなくて困っているようなお店もありますけど、何となく次の世代が育ってきています。さっきいった Z 世代の子供たちも本が好きだというのは、すごく心強いと思います。それは残していきたいなと思ってます。

——ありがとうございました。

(インタビュアー：一條麗美亜 整理：土屋)

後記:「ウォーカブルなまちづくり」をめぐる

フィールドワークを通じて、千代田区に昔から居住して生活の巨大な変化を経験してきたかたがたのお話をうかがうことができた。なかでも、年齢の高い人のお話が興味深かった。ある人が、「これ以上、再開発が進むと、歳をとってここで暮らし続けるのは非常にハードになる」と話してくださった。人は誰でも歳をとる。歳をとると、行住坐臥にも困難がつきまとう。歳をとったら誰でも大なり小なり身体障がいだ。歩道に存在する物理的障害を取り除いたり、車いすが行きかうことのできない幅を広げたりはもちろん必要である。だからこそ「ウォーカブル」という用語が使われているのだろう。その一方で、景観の激変がもたらす精神的な問題にも配慮すべきだと考えるようになった。

私は母親の介護で次のような経験をした。私の母はあるまちで幼少期を過ごし、結婚したあと、中年時代に家族でそのまちに戻った。その母が歳をとり、散歩のときに私が手を取って付き添うようになった。正直言って、私は若いときから、母親とのコミュニケーションを重視していなかった。母がこの歳になってはじめて、歩きながらいろいろな話を聞くことになった。結婚するまでの苦労話や父親のこと、私の兄弟のことなど、むかしのことをよく記憶していた。ところがあるとき、いつもの路地を歩いていたら、母は突然立ち止まって「あれ？ ここはどこ？」とつぶやいた。そのときの母の不安なまなざしに驚かされた。見回してみると、なるほど低層ながら新しいビルばかりになっていた。自分がどこにいるのかわからなくなる、いわゆるオリエンテーションの障がいはいこうして起こるのか、と悟らされた。次の瞬間、母は路地の彼方に和菓子屋さんの看板を見つけて、「ああ、ここか」と安堵の表情に戻った。

つまり、看板の手書きの文字（書道）は生きており、人間の精神活動や過去の記憶と結びついているのである。そうした看板は人の目線上にあるゆえ、ランドマークになる。しかし、大規模な再開発では、手書きの看板もつぎつぎに消えていく。そう考えてみると、精神や記憶と結びついている景観が歳をとると重要なのだ。残された景観は街路樹しかない、というところもある。いまの激変だと、自分も「ここはどこ？」とつぶやくかもしれない。それとも、どこか便利なところに引っ越すか。そこではもっと「ここはどこ？」になるだろう。

* 専修大学国際コミュニケーション学部 2023 年度千代田学 2024 年 3 月 31 日発行

発行者 専修大学国際コミュニケーション学部

編集 土屋昌明

印刷所 モリモト印刷



図 6

図 6 ガイコツの大舞踏会 Gran fandango y francachela (ポサーダ作、1900 年)。→本文 4



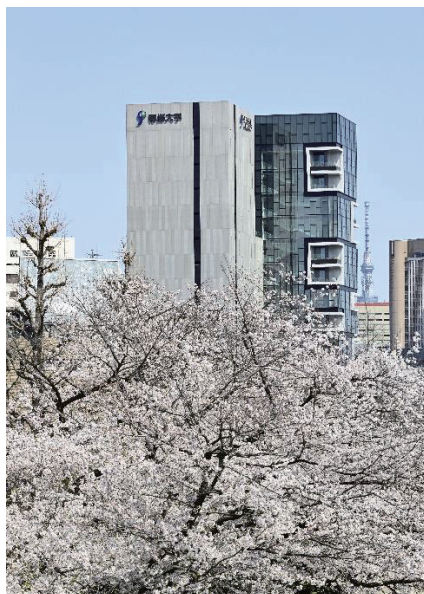
図 7

図 7 制作展示で活躍した 1 年生有志。→本文 4



図 8

図 8 夜間に浮かび上がるガイコツ展示。本学 10 号館 1 階靖国通り側フロント (図 1 を参照) に展示し、通行人の目を奪った。



専修大学国際コミュニケーション学部 2023 年度